【趣　旨】

北海道の農林水産物は、新鮮で美味しく安全性・品質が高いことから輸出が伸びています。

一方で、物流の効率化、貿易ルート開拓、取引に係る規制緩和、商品の安定供給と付加価値化等に関して様々な課題があります。これから道北の潜在力を発揮し輸出を拡大していくために、どのような課題と解決策があるのか。関係機関、関係業界がどのように連携していけば良いか、将来の発展性を展望します。

また、留萌港においては、韓国等へ道産木材の輸出が軌道に乗り始め、稚内港ではロシア・サハリンとの経済交流が行われています。重要港湾である留萌港及び稚内港のさらなる活用について意見を交わします。

◆◆◆◆プログラム◆◆◆◆

【挨　拶】　主催者　片倉　浩司　留萌開発建設部長
来　賓　稲津　　久　衆議院議員
渡辺　孝一　衆議院議員

【第一部】　基調講演　「北海道の農産品の物流課題とその対応」
川合　紀章　氏　（一社）寒地港湾技術研究センター事務局長

【第二部】　事例発表　渡辺　一裕　氏　留萌振興局森林室森林整備課主幹
太田　忠夫　氏　JA 道北なよろ販売部長
グレーブ・ジュラフスキー　氏　株式会社 G.I. プラン代表取締役社長

【第三部】　パネルディスカッション　「今後の道北農林水産物の輸出に向けた戦略的取り組み」
コーディネーター：川合　紀章　氏
パネラー：　留萌市　高橋　定敏　市長
旭川市　西川　将人　市長
稚内市　工藤　　広　市長

基調講演

「北海道の農産品の物流課題とその対応」

一般社団法人 寒地港湾技術研究センター事務局長
川合　紀章

北海道の農産品の物流の特徴は、出来秋の8月、9月、10月に一気に道外に移出されているということです。タマネギ・ばれいしょは若干保管されて4月ぐらいまでは出ていますが、それ以外の時期には、北海道からは農産品が出ていない。これが実は北海道全体の物流に大きな影響を与えています。北海道は製造業が弱いため普段は本州に出すものがあまりなく、北海道から本州への帰りのトラックが空になっているという状況です。物流の世界では「復荷」というのが基本で、行きも帰りも満杯にして物流コストを下げるわけですが、「片荷」となると帰りのコストは行きの荷物が負担するため、輸送コストが割高になっているというのが北海道の物流の特徴です。ところが出来秋になると、今度は北海道から出す農産品が満杯どころか臨時増車をかけて運んでいる。つまり、北海道は普段は出すものがなくて帰りの荷を空にしているのに、秋だけは農産品を高い運賃の特別増車で一気に出し、このため今度は本州からの帰りを片荷にしてしまって、輸送コストが高くなっているわけです。

農産品については、物流コストが高いだけではなく、もっと大きなビジネスチャンスを逃しています。ばれいしょが東京の市場にいつどの地域から入ってくるかというと、出来秋の東京市場は北海道が占拠します。ところが夏の間は北海道から出ておらず、九州や茨城からジャガイモが入っています。東京からの夏の需要に対して北海道は対応できていない。しかも高く売れるときに出していない。需要も満たしてないし、価格に対するビジネスチャンスも逃している。

この問題を解決するためには、産地の北海道で農産品を保管して需給調整すれば単に済む話なのです。このことにより輸送の平準化が図られ通年の安定供給を行うことができ、輸送コストを下げたり、農産品の戦略的な販売により価格を上げることも可能になります。また、北海道の安い土地で、雪氷冷熱の安いエネルギーを使って農産品を貯蔵することで、これまで発生していた首都圏の低温倉庫での保管費用も安くなる上、それが生産者の所得になるのです。

さらに、生産、貯蔵、加工、流通を一体化することによって地域に新たな地域産業を生み出し、地域の活性化を図ることができるということです。保管することによって高まるいろいろな付加価値を地元に落とすだけでなく、加工までできればもっと高い付加価値が得られます。そのために、生産地か流通拠点に、貯蔵、加工、流通を行う食料供給基地の形成が必要です。

最近、長時間運転の規制強化により、特に出来秋にトラックドライバーの不足が生じており、物流の問題が生じてきています。このため、トラックを早く走らせられるように高速道路の整備などの要望があります。しかし、社会資本の整備には時間がかかります。これは出来秋に農産品と水産品が一気に出荷される秋だけの問題なのですから、出来秋の農産品の出荷時期をちょっと変えるだけでこの問題が解決します。さらに輸送の平準化がなされ年中貨物が生じることで、苫小牧港にわざわざ運ばなくても留萌港からも道北の貨物が出せるような航路の可能性が生じてきます。道路整備も大切ですが社会資本の整備をお願いする前に、自分たちが物流を変える工夫をすることによって、課題が解決されたり、別のメリットも出てくるのです。

農水産品を輸送するための航路、航空機も船も同じですが、航路を確保して輸送コストを下げるためには、年間を通じてロット（貨物を一度に扱う量）の確保が必要です。そのロットを確保するためには、出来秋のピーク、これをカットして年間を通じた貨物を確保すること。それから地域が一体となって地域で一箇所に荷物を集めることが大事です。平成12年に開発局が、道北地域の産業を活性化するためにはどういった基盤整備が必要かという調査を行いました。道北全体では農産物の供給力は十分あるけれども、それがロットになっていない。地域がそれぞれ産出する農産品の量が少なく、地産地消と名前は格好いいけれど、その地域に売れる量しかない。道北全体だと、札幌や50万人規模のサハリンに売る量が十分にあるのに、リヤカーで集める小さいロットレベルでは産品にならないのです。これをある程度道北地域全体で連携してまとめることによって、札幌や関西、海外にも売れる。留萌でしたら極東アジア、それからウラジオストクなどの極東ロシア、稚内ではサハリンといったところに向けた産品になるのです。このように、道北の農産品はロットになっていないという指摘をし、そのための流通拠点の必要性を、実は15年前に調査報告していたのですが、その後動きがない。

ロットをまとめるということは結構大変です。北海道国際輸送プラットホーム（HOP）では、北海道全体で手を挙げる人がいなかったので開発局が「この指とまれ」とやったのです。それぞれの地域では、地域の皆さん方がみんなでまとまって手を挙げないと誰もやりません。地域でそういうことをまとめないと、いつまでたっても道北の農産品が外への産品とならない。輸出どころか札幌にも流れない。ロットを集約化して輸出するためには、そういった誰かが手を挙げるということが必要です。

留萌市では平成26年からの市の計画の中に、こういった農産品の冷蔵貯蔵施設整備の計画があると聞いています。また、昨年、旭川商工会議所の皆さんに、道北地域の農産品のロットをなんとか集めなければいけないので商工会議所も動き出したいという話を聞いたことがあります。そういうかたちで経済界が一緒になってやってくれるのは、非常にありがたいことです。これをしっかり皆さんが強固なものにして、是非オール道北で連携して、道北の農林水産品を生かして付加価値を高める動き出しをしていただけることをお願いして、私の基調講演といたします。

事例発表 「留萌港からのトドマツ材輸出」

留萌振興局森林室森林整備課主幹
渡辺　一裕

留萌港からのトドマツ輸出実績ですが、平成26年度に韓国向けと中国向けが留萌港から輸出されました。韓国向けは同じトドマツでもB材という、A材より若干欠点のある材です。一方、中国向けはC材で、いわゆる紙パルプの原料の中から腐れや曲がりの少ない材を集めて輸出しているということです。

原木の輸出に際し、造林等の仕事をしている方々は夏場に苗木を植えたり下草を刈ったりといった仕事や、あるいは農業をしているといった方々もおられるので、なかなか夏場に山に入って木だけを伐っているというわけにいかず、夏場の原木供給が難しいという事情があります。

その他、留萌港から韓国へ丸太を運ぶ貨物船で、逆に韓国から直接留萌港に物を運んでくる船はないことから、留萌から韓国に行くだけの片道運行となってしまい、運賃が高くなるので、商社のほうでは苫小牧や函館付近で空荷になっている貨物船を探すのに苦労しているという話です。さらに、海外輸出となるため、相手国の経済事情や為替に影響されるといった課題があります。

今後の留萌港からのトドマツ材の韓国への輸出は、せっかく平成26年度に確立した関係なので継続していきたいと考えています。我々、林業行政マンとしては、定期の間伐を推進していくためには、やはり少しでも森林所有者に間伐材の木材収入が還元されなくてはならないと思います。広い原木の集積場を有し、大量の原木輸送が可能な留萌港を活用したトドマツ材の販路拡大の取組について、関係機関と連携を深めながら実施していきたいと考えています。

事例発表 「JA道北なよろによる農産物の輸出」

JA道北なよろ販売部長
太田　忠夫

平成22年頃から、ホクレンはじめ、いろいろの方々にお世話になって、当初は小玉のカボチャを韓国に輸出させていただきました。それがきっかけでユリ根を台湾、香港、シンガポールにも輸出をしていました。

さらに、香港SOGOがちょうど今年で30年を迎えるということで、「北海道秋の食と観光展」に北海道のいろんな食材を販売したいという話があり、今まさに担当職員を派遣して販売をさせていただいています。ちょうどこの時期「国慶節」ということで中国本土から香港を訪れる人がずいぶん多いという話です。イベントには名寄市の職員も一緒に渡航していますが、会場で1日2回餅をつくイベントをやっているということです。来年開通する北海道新幹線のPRも兼ねたイベントということで参加をさせていただいています。

今年2回、香港で販売会をさせていただきましたが、やはり輸送コストや代金の回収、クレーム処理ですとか、いろんな課題はあるかと思いますが、今年の実績を次年度につなげていきたいと考えています。

それから11月26日に開催される今年2回目の沖縄での交易会には率直に言うと参加をさせていただきたい。ちょうど沖縄の那覇空港が航空貨物のHUB空港になっており、日本全国から那覇空港に行ってそこから夜中に東南アジアのほうに荷物を送り届けるシステムになっているということで、流通のほうも対応していきたいという考えでいます。

私どもの地帯は気候にも恵まれ、夏の温度差でカボチャやトウモロコシが甘みを増す。特にアスパラは作付面積160ヘクタールほどありますが、そういう作物を流通に乗せ、近隣の農協と連携をとりながら海外輸出を進めていきたいと考えているところです。

事例発表 「ユジノサハリンスクにおける道北物産フェアー」

株式会社G.I.プラン代表取締役社長
グレーブ・ジュラフスキー

ロシアではこの10年間に富裕層の人口が増え、その中に日本の商品に関心があり、あるいは日本に観光に行きたいという方はかなりいます。5年前から富裕層が高い収入を得られている時に、サハリンで北海道物産展を開催しようということで2011年と2012年に道庁さんの主催で北海道物産展が開催されました。商品は大変好評を得たので、さらにサハリンの富裕層は日本の安全、日本の高品質の商品に関心があるということで2013年から道北物産展が開催されるようになりました。

開催にあたっては様々な課題があり、その一つは為替レートの問題です。また、サハリンへの輸出の際、稚内の輸出倉庫までは低温で保管されるけれども、フェリーの中や、サハリンのコルサコフ港の保税倉庫にはそういった設備がないので、全部常温になります。いかに早く商品の通関を行うかが重要な課題になりますが、ロシアに商品を輸出する場合は大変複雑な手続きがあります。さらに、輸送手段の確保も課題です。

もう一つ、サハリン以外の地域に商品を運んで販売するにあたって商品を知らない方が大変多い。やはりサハリンの方に比べたら10倍くらいPRをしないとなかなかそういった商品は売れません。将来的にやはり、ウラジオストク、あるいはモスクワやサンクトペテルブルクなどの都市で販売するためにはもちろんPRが、また確実な輸送手段を確保することが必要です。

サハリンが近くて近い外国になるために、こういった貿易が発展すればもっと近づけられるし、当然それは北海道の経済にとっても現地の経済にとっても大きな発展に導く手段なのではないかと思います。輸出がいっそう盛んになることを大変期待しています。

パネルディスカッション　「今後の道北農林水産物の輸出に向けた戦略的取り組み」

川合　紀章　氏　まず、農林水産物の移輸出に関してこれまで進めてこられた取組などについてお話しいただければ。

高橋　定敏　留萌市長

高橋　定敏　留萌市長　2005年、留萌の商品をサハリンでPRしようと留萌市独自で物産展を開催しましたが、これらの取組は即経済活動にはつながりませんでした。やはりニーズを把握することができなかったのです。今は道や国、金融機関等がそれぞれの地域でいろいろな情報を得ているので、様々な角度からの情報をしっかりいただくことが課題解決の手段になるのではないかと思います。

工藤　広　稚内市長　今回の道北物産展を通じて特に印象が強かったのは、サハリンというのはウラジオストクの商業圏で、全てのことがウラジオストク、もしくはモスクワを通じないと何も決まらないんだなと。もう少しサハリンの州政府としてしっかりとした対応ができるよう求めていかなければいけないし、輸出に関しては季節に影響されないような輸出品の検討を進めていきたいと思います。

西川　将人　旭川市長　日本の食べ物が安心・安全で健康に良いということはロシアでも認知されており、物産展でも多くの皆さんに来ていただくことができました。今年はこれに加えて農林水産省の予算を活用して日本食のフェスティバルを開催しました。そういったイベントを通じ、今後ともいろいろなことを考えながらこの取組を絶やすことなく次のステップに繋げていきたいと思っています。

川合氏　今後検討していこうとされている具体的な取組や、その狙いなどについてはいかがですか。

工藤　広　稚内市長

工藤市長　相手国との関係において、サハリン州政府に対して輸出入の対応が一定であるように求めて行きます。輸入については、我が町は漁業が中心なので、現在鮮魚が非常に不足しているという地域事情もあり、鮮魚であればどうやって鮮度を維持しながら輸入していくかという問題について検討を行っています。また、島根県の浜田港が大陸側のロシアといろいろな取組を進めているので、それも参考にしっかりとした輸出入サポート体制を築き上げたいと考えています。

高橋市長　留萌港が中国の営口港と友好港を締結して今年で25年ということで、地元の對馬商工会議所会頭と私どもの中西副市長に代表団で行っていただき、営口市に対し観光客等を含めた経済交流を進めたいという要望をしてきました。また、ウラジオストクとハバロフスクと、友好都市を結んでいるウラン・ウデの三角地帯に極東アジア圏の新たな経済点を作るという大きな方針のもと、地域づくりが行われているので、ハバロフスクの玄関港と友好的な関係を作りたい。ハバロフスクとの経済的な交流の可能性についてロシアの総領事と会うたびに意見交換を進めています。さらに、私どもは数の子の加工技術をもっていますから、水産加工品を輸出できないかという点について、今後の課題として新たな取組をしていかなければならないと考えているところです。

西川市長　先日サハリンで選挙があり、新しい知事が誕生しましたが、新知事も公設市場や港の整備など、サハリンのインフラ整備をしっかりと進めていかなければという決意を述べています。コルサコフ港から揚げたものをサハリンの州都ユジノサハリンスクまで品質を保持した状況で運べるコールドチェーンができ、しっかりとした市場が形成されることを期待したいと思います。それが実現すればこちらからの輸出も拡大し、一方でサハリンをはじめロシアから北海道への輸入も増えてくるのではないかと期待しています。

また、現地にアンテナショップを開設できないかということでユジノサハリンスク市と協議をしています。これができれば日常的に私どもの地域の物を現地で販売することができます。水産加工品等も販売できることになるので、是非実現したいと思っています。

川合氏　最後に、農林水産物の輸出拡大に向けて、今後地域が連携して行っていかなければならないことは。

工藤市長　今、サハリン側は一定の条件のもとノービザで受け入れていただいていますが、日本側は依然としてビザが必要ですので、これをなんとか解消していただけるよう関係省庁に訴え続けています。併せて、高速交通ネットワークの整備を進めながら、集荷体制の確立に取り組んでいきたいし、また港湾の整備もしっかりと進めていきたい。これには国の力添えが必要ですけれども、そんなことを取り組んでいますので、是非ご理解を賜りたいと思います。

西川　将人　旭川市長

西川市長　旭川空港、今ロシアやサハリンとは残念ながら定期便等は結ばれていませんが、台湾、または上海、北京、韓国といったところと結ばれている関係で、昨年は1年間の海外の乗降客数が過去最高の16万人。海外への空輸ということも、これから真剣に取り組んでいきたいと考えているところです。こういったことをしっかりと活用しながら地域の農水産物等をどんどんと海外に輸出をしていけたらなと思っています。

高橋市長　留萌市も高規格道路がもうすぐ完成になります。留萌港と高規格道路が直結することで、素晴らしい効果が生まれると思っています。今大切なのは、情報を共有すること。留萌市では農協、漁協、商工会議所、観光協会、そして金融が揃って毎月1回経済活性化懇談会を開き、情報を共有しようという取組をしています。旭川市を中心に、地域のつながりによって、極東アジアだけでなく東南アジアに向けてもいろいろな展開ができるのではないかと期待しています。

川合氏　地域が連携して貨物を集める活動をすること。制度や規制、情報の共有を国や道とも連携して行うこと。これに加えて大事なのが基盤整備です。地域の港湾・空港から出すために地域ネットワークをいかに開発するか。それぞれの立場の中でこの三つを頑張っていかないと北海道の農産品、道北の農産品の輸出までもっていくのは大変難しいのではないかというご指摘をいただきました。

こういった課題に対してそれぞれが主役になって、道北地域の農林水産品が日本から海外へ輸出する輸出品の一翼を担っていただけるように頑張っていただけたらと思います。